

「お帰りなさい 天龍道人 展」ギャラリートーク

平成 26 年 4 月 13 日 (日)

エイブル 2 階 和室・床の間コーナー

(2) 天龍道人の後半生とその作品について

佐賀県立佐賀城本丸歴史館

企画学芸課長 福井 尚 寿

いま展示されている天龍道人の絵画の大半は、30 年ほど前に 15 点まとめて佐賀県立博物館が購入したものです。その前後から天龍道人のことを少し調べはじめて、平成 3 年には、「近世の肖像画」という展覧会を県立美術館で行ない、天龍道人の肖像画を展示しました。

天龍道人については、多くの謎が残されていて、その解明を進めるためにも是非、大々的に展覧会ができないかと思っております。亡くなったのが 1810 年なので、没後 200 年にあたる 2010 年に展覧会を画策しましたが、予算がどんどん少なくなっていく時期でしたので、大きい展覧会ができずに、小規模に展示した程度で終わりました。ただし、1818 年が生誕の年なので、4 年後の 2018 年は生誕 300 年に当たります。次はその機会を狙っているのですが、出身地の鹿島の盛り上がりがあれば、これから先、あと 4 年ほどありますので、大きな展覧会につながっていただけるのではないかと期待しております。

今日の話は、後半生の絵画制作を中心に、先ほどの松尾先生の前半生の話につながるような話になればと思っております。

はじめに天龍道人の絵画制作の開始時期を確認して、つぎに作品を署名などに着目しながら見ていきたいと思います。

略年譜にも記していますが、絵画制作が始まるのは明和 8 年 (1771) 54 歳頃で、かなり年をとってから、絵画制作を始めたこととなります。最も早い年記作品が明和 8 年の《菊図》で、天龍道人を偲ぶ会編『天龍道人画譜』(甲陽書房、昭和 55 年)に掲載されています。つまり、画面に「辛卯中夏初二／虚庵道人写」と年記と署名があり、「辛卯」は明和 8 年にあたり、「中(仲)夏」は 5 月、「初二」は初旬の 2 日と解すれば、日にちまで確認できる作品となります。署名は、「虚庵」になっております。

もう 1 点、同じ年の作品として、静岡県立美術館所蔵の《葡萄に栗鼠図》が知られています。「辛卯初秋 虚庵源義教」と、おなじ「辛卯」の年記があり、初秋は 7 月で、「虚庵」の署名につづけて「源義教」と署名されています。天龍道人が得意とした葡萄画は、絵画制作の最初期にすでに描かれていたことがわかります。

天龍道人の絵画学習については享和 2 0 年 (1735) 頃、18 歳頃に「長崎で沈南蘋しんなんひん門人熊斐くまひ(神代繡江)に学ぶ」とされており、「信州仙人床」という史料を典拠とした推測のようです



菊図

54 歳

(天龍道人画譜 3)

が、絵画制作がはじまる54歳頃まで、20数年のブランクがあり、このブランクについては今後検討が必要です。

天龍道人の絵画制作は、54歳頃から死去する93歳近くまで、およそ40年間で、その期間をとおして葡萄画を描いています。その間の画風の変化をみてみますと、まず『天龍道人画譜』掲載図版13《葡萄図》は、年記がありませんが明和8年54歳作《葡萄に栗鼠図》の葡萄と類似することから、初期に属する作品と思われます。一方、おなじく図版142《葡萄図》は「天龍道人八十二歳写」と署名のある82歳作の葡萄画になります。両者を比較すると、図版13《葡萄図》の方が葉の墨の暈しが効いて潤いがあり、蔓についても曲線がより流麗に仕上がっています。30年間の変化としては、それほど大きくはないとしても、細かくみると違いが観察されます。

ここで注目したいのは署名で、図版13《葡萄図》は「王乙翁」と記されています。一方、晩年の82歳には「天龍道人」と署名されています。天龍道人は姓が王で、名が瑾、字が公瑜と自ら名乗っており、署名に「王瑾」をはじめ、さきほどの「王乙翁」、「乙翁王瑾」、「王瑾公瑜」、「王公瑜」などの署名がみられます。また、初期に先ほどの「虚庵」、「虚庵道人」のほか「草龍子」や「源義教」という署名もみられます。「源義教」の署名についてはのちに紹介します。それから晩年、足を折って不自由になった時期から「折脚仙」という号を使っています。「王」を姓としたことについても後でふれますが、名の「瑾」については、「固くて美しい玉」という意味で「瑾瑜」も同じような意味で使われているようです。「王瑾」というのは、ひっくり返すと「瑾王」で、勤王思想の「勤王」と音通するところから、天皇親政を理想としていた道人が自らの名前にしたのではないかと想像しています。

ほかに、今紹介した姓名や号に冠して「長門」や「錦水」、「錦水漁叟」の文字を添えた署名をもつ作品が残されています。「錦水」は『天龍道人画譜』掲載図版15の安永2年（1773）56歳作《梅花寒月図》や同じく図版35の安永5年（1776）59歳作《鷹鷄図》にみられ、「錦水」から岩国の錦帯橋が架かる「錦川」が連想され、長門や周防岩国あたりに滞在していた時期があった可能性が考えられています。

この後に、「鷺湖」、「鷺湖漁叟」、「鷺湖逸士」などが出て参ります。鷺湖というのは諏訪湖の別称で、61歳で下諏訪に家屋敷を購入すると年譜にあり、それ以降の作品に、たとえば「鷺湖王瑾」という組み合わせの署名がみられます。

「天龍道人」という署名は、70歳頃からのようです。諏訪湖を源流とするのが天龍（竜）川で、浜松辺りに流れ下って太平洋に注ぐのですが、この天龍川にちなんで「天龍道人」と称したわけです。「天龍道人」と署名をした作品で、制作時期が判明する一番早い作品は「天龍道人王瑾七十三歳筆」と署名された『天龍道人画譜』掲載図版77《鯉魚図》のようで、寛政2年（1790）作になります。「天龍道人」を名乗るのは、安永7年（1778）61歳にして下諏訪に家屋敷を購入して住みはじめてから約10年後のことになるようです。この作品は、いわゆる「鯉の滝上り」で、ほかにも天龍道人は鯉を題材とした作品



葡萄図
82歳
(天龍道人画譜142)



葡萄図
(天龍道人画譜13)

を描いており、諏訪湖の鯉を写したと画面に記された作品も残されております。鯉という題材も天龍道人が住んだ、諏訪湖にちなんだ題材と言えます。

つぎに、王を姓とした経緯を記した史料を紹介します。皆様にお配りしている「天龍道人^{ひげつめい}碑碣銘」がそれで、『諏訪史料叢書』の「天龍道人史料」のなかに収録されています。「天龍道人碑碣銘」は、文化5年（1808）に天龍道人の門人である武井睿という人物による撰文です。内容については、天龍道人91歳の在世中の撰文であるので、その内容は非常に重要です。

最初に、「天龍道人は九州の肥の人なり」（原文は漢文）とあり、「肥」だけで肥前か肥後かまでは書いてありません。つぎに、「姓は王、名は瑾、字は公瑜」と記され、「大織冠藤原公の裔」、つまり藤原鎌足が自分の先祖で、さらに「五州大守龍造寺山城守隆信の七世の孫なり」と記されています。天龍道人が龍造寺隆信まで血縁をたどることができることは、さきほど松尾先生が紹介されましたが、龍造寺氏の系図を更にさかのぼると鎌足にたどりつくようです。つぎの「父舎人介藤原忠隆、母源氏」は、先ほど松尾先生が紹介された中では、忠堅とか忠昭とかいう名前になっていましたが、この「天龍道人碑碣銘」では、忠隆となっています。この違いについて想像をたくましくすれば、これも松尾先生が紹介された「小鍋騒動」といわれる幼少期の事件や、明和事件や宝暦事件に加担した関係から、自らの素性を明らかにしたくない事情があり、名前を1文字違えることで曖昧にする意図があったとも想像されます。

天龍道人のことを調べ始めた頃は、鎌足や隆信を先祖とするとか、自ら龍造寺主膳と名乗っていたり、鹿島を出身地とすることを含めて本当なのだろうか、むしろ疑わしくおもっていました。それが長野県のある図書館で、『諏訪史料叢書』に収録された天龍道人の漢詩集のなかに、松尾先生も紹介された、「故郷を夢見る 鹿城は余の故郷なり」という題の詩が見出され、鹿島を故郷としたのは間違いのないことと納得した次第です。ただし父の板部氏のことや龍造寺氏とのつながりまでは調べきれなかったので、今回そのあたりのことが確認され、私にとっては大変ありがたく思っております。

「天龍道人碑碣銘」に戻りますと、王を姓とした経緯が、「昔、源平の…」というくだりに記されています。源平合戦は、壇ノ浦の戦いで平氏が敗れ、そのとき安徳天皇が身を海中に投じて崩御されるという歴史ですが、異なることが記されています。つまり、源義経が策略を巡らせて、妾の子を安徳天皇の身代わりとして送り込み、実際に死んだのは義経妾の子であったというわけです。生き延びた安徳天皇は、「肥筑の間」と肥前、肥後、筑前、筑後のどこかは不明確ですが、都落ちして、それを実際に手配をしたのが義経の妾で、この妾は義経の子どもを身ごもっていて、やがて男子が生まれ、安徳天皇から千一丸という名前を賜ります。千人に一人の豪傑という意味をこめた命名ということです。ある時、旗にその名前を書いたとき、「千一」は両文字を間隔なく縦書きすると「王」とまちがわれ、やがて「王」と名乗るようになったというわけです。「王」を姓とする家は代々続き、27世後に至り、ついに男子が生まれず女性だけになり、この女性を妾としたのが父親の忠隆で、生まれた子どもが天龍道人であると記されております。

「源義教」の署名について、「天龍道人碑碣銘」には記されていませんが、源義経の妾の子を祖先とすることにちなんだものと考えられます。このように鎌足や義経などの人物と天龍道人の関係は、真偽はともかくとして、先祖の優秀さを表明することで、天龍道人が自分の意識を高めようとしたとみなせないでしょうか。

天龍道人は、江戸時代半ばの画家ではあるのですが、信州、今の長野県では最も活躍時期の古い画家と

して位置づけされているようです。ちなみに、肥前はもう少し遡って、室町の終わりぐらいから、この地で活躍した画家を作品とともに確認できます。

つぎに、葡萄と鷹をよく描いた点と、熊斐を絵の師匠としたとされる点を確認したいと思います。葡萄画といえば中国の宋の終わりから元の初め（13世紀）に活躍した日観という画家が有名で、この日観の影響で日本でも葡萄画がひろまったと考えられておまして、天龍道人と同時代の有名な伊藤若冲も描いております。ただし天龍道人は、およそ40年にわたって葡萄画を精力的にこだわって描いた点で特筆すべき画家と言えるわけです。この葡萄については、晩年、葡萄の葉や蔓、花実の描法などを詳しく記した『葡桃画則』（文化3年〈1806〉序／89歳）という本まで出しております。

一方、鷹画は、制作時期が判明する作品では安永5年（1776）59歳作の《鷹鶉図》が最も早い作品になるかと思えます。鷹画には、水墨で描いたものと、濃密な色彩でもって描いたものがあります。鷹画は、葡萄画と同じように絵画制作期間の早い時期から晩年まで描いていますが、葡萄よりは緻密で手の込んだ描写になりますので、晩年になるにつれて作品は少なくなっていくます。

天龍道人は、鷹を飼っている鷹匠の家で生態を観察して、様々な鷹の姿を描いたと言われていますが、その詳細は確認できておりません。ただし、天龍道人が描いた鷹には、腹の様子が縦方向のものと横方向のものがみられ、図鑑で確認すると、若鳥では縦方向に縞模様となり、成鳥になると羽が生え変わって横方向になるそうです。天龍道人は、若鳥と成鳥とを描き分けていることが確認できます。

つぎに、鷹画の画風変化をみるために、「乙王」と署名された69歳作《梅に鷹図》と88歳作《葡萄に鷹図》をくらべてみます。69歳作《梅に鷹図》の方が緻密な描写になっており、また量感のある姿に仕上がっており、88歳作《葡萄



葡萄に鷹図（部分）
88歳 佐賀県立博物館蔵



梅に鷹図（部分）
69歳 （天龍道人画譜60）

葡萄に鷹図》は装飾的で平板な作品にみえます。20年の隔たりのある新旧の鷹の絵では、69歳作作品の方が、描写密度が高くすぐれているといえます。

鷹鶉図
59歳
（天龍道人画譜35）

それから、『天龍道人画譜』に掲載されている安永5年（1776）夏59歳作《鷹鶉図》（図版35）や《海棠に鷹図》（画譜32）も比較的早い時期の充実した鷹画であります。たとえば、《海棠に鷹図》の鷹の睨み付ける姿からは、迫力が感じられます。いずれの作品も私は実物を見たことがなく、是非このような充実したすぐれた作品を見てみたいと思っています。

さいごに、「長崎で沈南蘋門人熊斐に学ぶ」とされる天龍道人の画風を確認します。たとえば、鷹がとまっている木をごつごつと節を多用し、また苔むした状態に描かれていますが、このような描法は、いわゆる沈南蘋流の特色で、年譜で記される熊斐の影響によるものといえます。

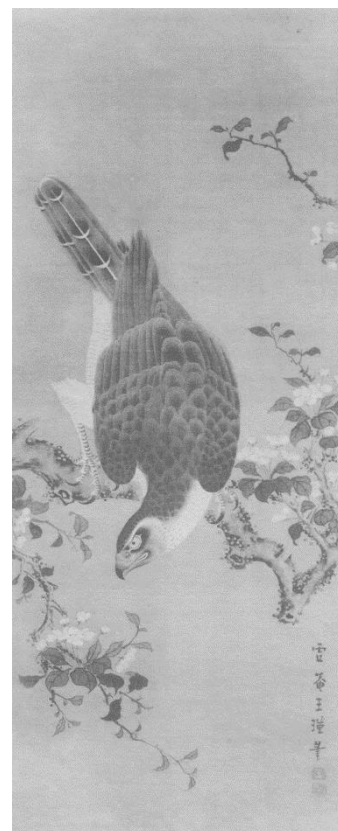
熊斐（1712～73）は天龍道人より6歳年上で、姓は神代、名は斐あやむといひます。神代の「神」を「熊」に変えて、中国ふうくましゅうに熊斐と称しました。長崎に渡来した中国清時代の画家、沈南蘋に絵画技法を学んだ唯一の日本の画家が熊斐です。写実的な花鳥画で知られる沈南蘋の画風を学ぶため、熊斐のもとには全国から多くの弟子が集まり、やがて沈南蘋流の画風は大流行します。この流派の一人に、天龍道人も属しています。

天龍道人の鷹画を熊斐の作品とくらべると、天龍道人の鷹画は、あきらかに写実性が低くなり、装飾化がすすみ整えられた鷹画になっています。一方、鷹の生態を観察して描いたと言われていますけれど、鷹の描き方は伝統的な日本の鷹の描法に習っておりまして、たとえば江戸時代前期、17世紀の《架鷹図屏風》に描かれた鷹と比べると、むしろ類似した描法であることがわかります。

天龍道人が描き残した作品のうち、さきほどの《鯉魚図》には熊斐に同じ題材の作品が知られ、また鷹についても沈南蘋流の画家に類似の鷹画が残されています。さらに、鷹以外の鳥でも後半の展示となる《粟穂に叭々鳥図》は、くちばしの付け根の毛が逆立った中国に生息する鳥、叭々鳥を描いた絵で、昆虫をくわえて悦に入っている姿ですが、熊斐の門人で南蘋系の森蘭斎という画家の『蘭斎画譜』に一致する図様がみられます。この昆虫をくわえた叭々鳥は、ほかの沈南蘋流の画家にいくつも作例が残されています。天龍道人の画風は、沈南蘋から熊斐に伝わり、さらに全国に広まる沈南蘋流の画家の系列に属していることが確認できるのです。

ただし、ほんとうに熊斐に直接学んだのか、天龍道人のくわしい絵画学習については、今後も検討が必要です。

今日、スライドで準備しているのはここまでで、あとは作品が展示されたコーナーに移動して、表題のギャラリートークを行います。



海棠に鷹図（天龍道人画譜32）



粟穂に叭々鳥図 佐賀県立博物館蔵

<床の間コーナーにて>

先ほど説明しましたが、ご覧のとおり天龍道人の作品には「天龍道人」と署名された作品もあれば、「王瑾」とか「鷲湖」と書いたものもあります。「天龍道人」以外の署名は全国的にあまり知られていないので、皆さんの中で古美術収集を趣味にされている方がおられれば、たとえば古美術店で「王瑾」と署名されていても、名前の知られていない画家として売られている場合もありますから、「王瑾って誰でしょうね」と知らないふりをして、安く買い求めることができるかもしれませんね(笑)。

中央に展示している《梅に鷹図》には、画面右上に「鷲湖逸士王公瑜瑾図於長姫城東橋居」と記されています。「長姫城」は、天龍川支流の長野県飯田市の飯田城のこと、「橋居」は仮の住まいのことで、飯田城東の仮住まいで制作された作品です。天龍道人の代表作のひとつで、明治22年創刊以来、現在も刊行されている大ロングセラーの月刊誌『国華』に掲載されたことがあります。『国華』は、東洋美術研究の権威ある月刊誌で、『国華』掲載自体が作品の優秀さを示しています。

その右側の《葡萄に鷹図》は、県立博物館でまとめて購入した15点の天龍道人作品ではなく、それ以前に購入した作品です。葡萄と鷹という天龍道人の得意とする題材がそろって描かれているので、これに勝るものはないだろうということで、購入した作品です。

葡萄画については、この《葡萄図》の賛文が重要です。「鷲湖折脚仙九十一歳天龍道人王瑾」の署名から、最晩年の91歳の作品とわかることも重要ですし、賛文を読み下すと、「かつて葡萄を描くもの、果を描き花を描かず。われはこれ新様を写し、千載一家をなす。」と記されています。賛文をふまえて、この作品の葡萄をみると、点描風に描かれているのは果実ではなく、花であり、花が咲いた状態の葡萄を描いた珍しい作品といえるでしょう。葡萄を描く場合、実をつけた状態で描かれるのが一般的ですが、天龍道人は花の状態を描いており、そのことを賛で、これまでにない新しい葡萄画を描き「一家をなす」と自負しているのです。天龍道人の葡萄画には、1月から12月までの葡萄の様子を各1図、計12枚描いて、6曲1双の屏風に貼り付けた珍しい作品もあります。

天龍道人が絵画制作を行ったのは信州でしたので、佐賀県内にはあまり作品が残っていませんし、現在所在するものも後世、収集されたものがほとんどです。一方、信州諏訪湖周辺に行くと、天龍道人の作品は多く残されています。

ですから、4年後の生誕300年には、県立美術館あたりで大々的に展覧会を、願わくば長野県内の美術館か博物館とタイアップして両方で開催し、さらにこちらとも展示やイベントなどで連携できればと考えております。実現の際は、よろしくお願ひします。ありがとうございました。



梅に鷹図
佐賀県立博物館蔵



葡萄に鷹図
88歳作
佐賀県立博物館蔵



葡萄図
91歳作
佐賀県立博物館蔵